

杉原一司全集のために

—記憶をめぐる対話—

岡村知子・杉田佳凜・田中仁

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 20 / No. 3

令和6年3月27日発行 March 27, 2024

杉原一司全集のために

— 記憶をめぐる対話 —

* 岡村 知子・* 杉田 佳凜・* 田中 仁

キーワード…杉原一司、全集

『地域学論集』第一九巻第三号から第二〇巻第二号にかけて、「杉原一司全集のために—準備稿—」と題し、既刊の著作目録や未刊資料をめぐる考察を掲載してきたが、全集編纂にあたり、御遺族の一司への思いやご存じの情報をお伺いしておきたいと考え、インタビューを企画した。まず、岡村・田中・杉田の三名によって質問事項を挙げ、一司のご長男である杉原ほさき氏と、甥にあられる安藤隆一氏へ送付。二〇二三年九月一〇日に、岡村と杉田が杉原家を訪問させていただいた。当日は、インタビューの形式はとらず、ほさき氏と安藤氏の忌憚なき語らいを録音させていただいた。文字起こししたものを稿者ら三名によって整え、ほさき氏・安藤氏にご確認いただいた上で、岡村が原稿として整形し注を付した。これを稿者らで検討し、再度両氏にご確認いただいたものが、一く一節の内容である。

杉原一司歌集刊行会編『杉原一司歌集』(綜合印刷出版 二〇二〇年三月)の巻末に収められた年譜によれば、一司は一九二六年八月二七日に鳥取県八頭郡丹比村(現・八頭町)に生まれ、四四年に安藤令子氏と結婚、四七年に長女ゆあみ氏、四八年に長男ほさき氏をもうけ、五〇年五月二一日に二三歳の若さで病没している。

同い年であるほさき氏と安藤氏は、一司についての直接的な記憶はお持ちでなく、この日のお二人の対話は、令子氏が晩年に書き残された、一司にまつわるメモ書きに沿って行われている。一司の家庭環境や学びの背景、令子氏との関係等、御遺族しか知り得ない情報が貴重なものであることはもちろん、ほさき氏がご自身の御仕事を通じて、不在の父親との内在的な結びつきを見出し、いかれたプロセスは物語として興味深い。一司の作品

と向き合う上で、繰り返し参照させていただきたい。(岡村知子)

一、生い立ちについて

安藤 ほさきさんの考えとして、家族の関係が割と歌や人生に影響しているのではないかと。

杉原 一司の父の生まれは、いわゆる田舎の庄屋というかね。そんなにもすごいお金持ちということではないですよ。小さい庄屋の次男なんです。

安藤 元治さんが。

杉原 うん、元治さん。元治さんは子どもの頃に怪我をして、耳が聞こえなかった。学校には行って普通に生活できるのだけど。それで母はというと、矢部家という家から来て。

矢部家はどういう家かというと、もともと若桜に若桜城というお城がある。若桜城は秀吉に攻められて城主が変わるのだけでも、その若桜城の元をつくったのが矢部家です。何代かずと続いているのだけでも、途中から落ちのびてね。近くの若桜との間にある、矢部家の家が重要文化財になっています。

* 鳥取大学地域学部准教授

** 鳥取大学附属図書館職員

*** 鳥取大学名誉教授

安藤 名家なんだな。

杉原 名家なんだけれども、没落しているんでね。その名家からなせ杉原家に嫁さんに来たかというと、実は長男も結婚していてね。元治さんもその家におって、同じ家に二夫婦がおったわけ。長男に子どもができなかったので、元治さんが跡を継ぐという前提で嫁さんに来たんだが。

そうしているときに、長男に子どもができてしまった。それで離婚して。一司ができてからすぐに別れてしまった。一司がまだ一歳か二歳か分らないけど、小さいときに。離婚して矢部家に帰って、その人は若桜に行つてまた再婚する。一司から見たら、全く理にかなわない話なわけよね。自分が生まれていること自体が。病気で亡くなったというならええで。それから今の家に分家するからというので、元治さんは次の奥さんの美智子さんを後妻に迎えてね。ここに一司を連れてきたわけだ。

そういう自分の生い立ちに関わる、家制度のような封建的部分と、戦中から戦後へという時代の変化があったので、ものすごく世の中に反発していたんだと思う。実際には活動はしていないけど。それから始まっているんよ、だいたい。

安藤 もう少し言うと、安藤家のほうも、令子（おばちゃん）の父親の茂（私の祖父）は三回結婚していて、最初が三枝、二人目のよしが令子の母で、これも亡くなって⁽¹⁾、重が僕らの知つとるおばあちゃん。事情は違うけれども、まあ単純ではない。うちのほうは家制度ではなくて、単にころと亡くなって。

杉原 継母に育てられた者同士だよな。

安藤 そうそう。令子さんのお母さんは亡くなっているけど、一司の方はまだ生きとんさるけん。実のお母さんが生きとるのに、別のお母さんがおるわけだ。

杉原 生みの母は近くの若桜に再婚していったのだけれども、一司が一回も会っていないのは確かみたい。それだけ何か自分では思うところがあったんだと思う。自分から会いたくても、そんなことは言いたくないというのは思うだろうしね。相手も気を遣っていたのか、それは分らんけど。

安藤 それが文学のバネの一つになっているというか。それと戦後の価値観の大きな転換の中で、家制度などに対する反発があった。

杉原 そうそう。その反発と、自分自身がそういう生まれ方をしているので、自己実現というか自己確立として、やっぱり何かの世界で有名になっ

て、俗に言えば見返したいというような部分があったのではないかと思うんだが。それは、本人が感じていたかどうかは分からない。結果としてはそうだと思う。

二、商業学校での出会い

安藤 次に鳥取商業学校（現・鳥取商業高等学校）の問題があるわな。商業に行きなつたという。これは、わしは大きいと思うな。

杉原 いわゆる田舎の人は、鳥取第一中学校（現・鳥取西高等学校）には行けなかった。商売人の家の人は特に。だけん商売をやっている家の賢い人はみんな商業だった。どちらかといったら役人の世界が一中の世界。この辺では商業に行く人も一部の人間だけだね。

安藤 当時の商業というのは相当な人が出とるよね。要は一中に反発したような人とか。

杉原 やっぱり、一中に対する対抗意識が強くてね。だから何かで一旗揚げようというような気概を持った人が多かったかもしれん。感じとしてはね。

安藤 一司さんはこの頃の商業で切磋琢磨したわけだな。短歌を始めたり。

杉原 みんなしとんさつたみたいだよ。時代が違うけどね、いろいろなことを体育系以外でやるうといつたら、あまり選択肢がなかったのかもしれない。いきなり小説を書くというわけにもいかんからね。

安藤 ここ⁽²⁾に出ってくる新野幸次郎さんは神戸大学の学長になって、経済学の世界では、僕らは存在をよく知っている。そういう人と一緒に過ごしておんさつたんだな。

杉原 新野さんは近くの酒屋さんをやっていて、一つ新野さんのほうが大きいけれども仲が良くて。新野さんはそれから神戸大に行くのだけれども、行かれてからもお母さんやは地元に住んでいて、うちのお母さんとものごく仲が良くて、ずっと死ぬまで付き合っていたような関係。

安藤 岸本光治さんも商業。

杉原 そうそう。歌の関係でいったら岸本さんが一番仲良くて、『メトード』まで付き合うのだけれども。

安藤 亡くなるるときも、岸本さんに資料の始末を頼んだぐらいの仲だったわけだな。

ね。

岡村 一司の軍隊経験についてですが、いわゆる外地に出るといことはなく、宮崎のほうで。

杉原 出征してちよっとして、もう終戦になったからね。だから外地に出るとか、戦地に赴くというイメージじゃない。

岡村 世代的にはいわゆる戦中派ということになると思うのですが。日下部さんは敗戦に衝撃を受け、戦後、反動で呆けた状態からいまだに立ち直れていないというようなことを書かれています^⑥。一方一司は、敗戦すぐに軍国主義批判であったり、短歌がそれに加担したことへの批判などを展開していきます。だから、あまり戦中戦後で世界が崩壊するというようなことは……。

杉原 戦争そのものに対しては批判的だとは思いますが。だけど具体的に自分が出征する段階で、友達や先輩はいろいろと行ったりしているので影響はゼロではないにしても、本人はそこまで深刻に戦争自体から影響を受けていないような気はします。

四、結婚後の生活

安藤 安部国民学校では、安藤令子と会ったのも大きいだろうな。

杉原 母は一司より二歳年上でね。私が聞かんだこともあるけども、母は一司についてはしゃべらない人だった。特に、一司が亡くなって私がまだ子どもの頃は、だいたいそういうことをしゃべらないわね。大人になったら普通、もつとしゃべるかなと思っただけ、ちよつと姉が二歳か三歳で亡くなったんでね。これは事故で、病気ではないんだけれども。

安藤 昭和四四年だな。ゆあみちゃんが亡くなったのは。俺らが大学に行っていたときだよな。

杉原 ちよつど私が大学二年のときで。年齢は一つ、学年は二つ上なんだけれども。子どもが姉と私で、どちらかというとゆあみのほうが父親に似ているとかね。私は母似だし。夫が二三歳で若くして亡くなって、どちらかというとそれに近いようなイメージの、大事にしていた娘もまた若くして亡くなったので、何かトラウマというのかな。まずそういうことを思い出したいくないという感じが母にはあったので、自分から一司に関するエピソードをしゃべるといことはほとんどないか、まずない。だから私も、父親がどういふ人だと聞いたことがない。ただ歌人ですごい人だっ

たど。いいとか悪いという意味じゃない。すごい人だったという言い方は聞いているけど。ただ、それぐらいだな。

安藤 おばちゃんのメモの最後のところに、前川佐美雄や塚本邦雄から一司に送られた手紙があるけれども子どもたちが切手を破ってしまった、という一文がある。小学生のときに切手集めが流行つとつて、何か知らんけど切手があるわやということ僕も一緒にちぎってしまった^⑦。それは、そんなすごい人だと思っていないわけですわ。

杉原 あまり手紙そのものに興味はないし、当然、歌も自分としては興味がないのですね。

安藤 あれは怒られたんか。

杉原 まあ、しゃあないなという感じで、別にやめんさいという感じでもない。

安藤 そういう意味では、歌の世界に対して一司宛の手紙が貴重だという感覚はおばちゃんにはなくて。数少ない一司さんの思い出の品として、塚本邦雄からの手紙を残しておられたのではないかと。

杉原 ただね、母の感じでは、塚本邦雄さんをあまりよくは思っていないかった。どちらかというと前川佐美雄のほうをね。だからお母さんの歌というのは前川佐美雄の流れを汲んでいる。一司のように新しい言葉を使つてというのではなくて、どちらかというと抒情的な雰囲気に近いような歌で。まあ、一司があまりにも塚本さんにのめり込んで、週に一回以上かな、二回ぐらい手紙のやりとりをしていたので。

安藤 夫を取られたというか。

杉原 そういう感じだと思ふ。

岡村 全く同じことを塚本青史さんもおっしゃっていました。

安藤 一司の死後、塚本さんが『水葬物語』を送ってきたのにお礼を出していないという。それで小谷五郎さんに叱られて……。

杉原 たぶんうちの母だったら普通、お礼状を出さんということはないと思う。だからあえて、無視しているというわけではないけれども、まあいいやという感じだね。杉原令子があくまで母親というか、妻であったり、家庭のことを考えるけれども、杉原一司がそれだけ家庭のことを全く考えない人だったのだと思う。

安藤 放り出してな。だってあんたが生まれてすぐなのに天理語学専門学校に行つちよつとるわけだろう。そんなのは考えられんな。

杉原 普通はな。

安藤 自分の子どもが生まれてかわいい、かわいいのに行ってしまううのは、僕らだったらそうはならないな。

杉原 だからそういう面で見たら、ほとんど構わないというかね。別に嫌っているわけでも何でもないのだけど。普通だと子どものために、妻の言うことだったら少し聞いて、何とかせにやいけんとか、もう少しどうしてやろうというかなことを考える。だけど、たぶんそういうことすら考えないというか、考える余裕がないぐらいに歌に傾倒していたというのが正しいんだと思う。

それに、たぶん健康のことを感じていたんだと思う。自分の寿命とかね。死生観がもともとあって、特に歌をやってね。最終的には病気で死ぬのだけど、急に病気になるわけはないから、そうはいつても一年前、二年前ぐらいには体調がよくないとかね。結構、がたいはしつかりしていたみたいだけれども、母が言うのには、臓器が弱い部分があるというかね。本人もたぶんそれを感じていて、早くしなきゃというか。だからとりあえずは自分がやりたいことを早くして、自己実現ではないけれども、しなれば駄目だという思いのほうが強かったのではないかなど。

一司は、少しは小学校で働いていたけど、大した勤めもせずに天理に行ったり。家にそんなにお金があるわけではないが。母は、結婚して持ってきたものは全部売らざるを得なかった。一司のためにみんな売っぱらって。そんなにお金があるわけではないのに好きなことをしているということは、たぶん家の人がみんな出している。杉原一司の中で、令子は別にして、元治さんや美智子さんにお礼みたいなことは一言もない。不思議にほとんど。というのは、やはり負い目を感じたんだろうな。元治さんや美智子さんのほうが。

五、前川佐美雄との関係

安藤 おぼちゃんから聞いた話では、そんなに豊かではないのに鳥取からいろいろと前川さんに貢物をするものだから、金持ちだと間違えて来てしまったという⁽⁹⁾。

杉原 まあ、その可能性はあります。うちはそんなに豊かではないのだけど、なぜそんなことができたかという、実は元治さんがここに分家してもらってタバコ屋や駄菓子屋もして、当時、食堂というか一杯飲み屋

みたいなものをやっていた。駅前だということ、物が買えたみたいでね。魚とか、いろいろなものを。普通の人はなかなか買えないのに。

安藤 戦時で、だんだん物がなくなってきた。

杉原 そう。うちの場合はそういうルートがあつて何でも買えたんだが。そういうことがあつて、息子のためにと思つておじいさんやおばあさんが送っていた。

前川さんとは私自身、二回会っています。『鳥取抄』(山陰観光旅行普及会 一九五〇年一月)などいろいろ歌つておられるので市町村が歌碑を作るということになって、その除幕式に来られると⁽¹⁰⁾。来られたら俺がだいたい車で案内して、砂丘に行つてみましょうとか。食事も二回しましたかね。近くの旅館で。

安藤 どうでしたか。

杉原 何だ、あなたは歌はやらないんかやという雰囲気、初めポーンと言われて。

安藤 ああ、なるほど。一司の息子だけん。

杉原 全然そつちの世界は駄目なんですと言つたら、ふうん、そうか、という感じでね。それ以降、歌の話はしていない。母と一緒に、母がいろいろ昔の話や息子の佐重郎さんのね、そんな話ばかりなんだけど。感じとしては、作家でいえば川端康成とか、ああいう雰囲気の毅然としたシヤキツとした人で。短歌の有名な人というのはこういうもののかなという感想しかないんだけどね。

六、小谷五郎との関係

安藤 あと話題としては、丹比小学校の話だね。

杉原 同僚の岩村泰治さんは、元は国語の先生でした。小谷五郎さんはいろいろやっとなさって、教頭をしようとさる。ちょうど私が小学校の頃は母も含めて全部学校の先生だったんで、当然よく知つていて。ただ、ものすごく人となりは違います。岩村泰治さんはものすごく神経質で、結構きりつとした、全て筋を通さなければいけないみたいなね。

安藤 ここに、文学論や歌論について、私は一司さんから新しいこと多くのことを学んだとある⁽¹¹⁾。そのときに頑張つて学校新聞を作つたり。それはその後の一司さんに影響があるのだろうか。

杉原 『花軸』を作つたりするのだけど、丹比小学校にいたのは一年半か

二年くらいなので、特に影響があったのは小谷五郎さんのほうだと思ふ。小谷五郎さんは、ものすごく懐の広い、人当たりのいい人。子どもらに對しても。みんなに好かれるようなタイプの先生で。この地域ではとても有名な人です。絵もそうだし、文学や地域の郷土史の關係とか、そういうのも全部やってなさったんでね。だから知らん人がいない。たまたま杉原一司が一年半ぐらい働いていたときに一緒だったというのは、たぶんものすごく影響を受けているんだと思ふ。いろいろな面で。

安藤 さらにおばちゃんは、大変、小谷五郎さんの世話になつて。

杉原 そうそう。学校に復帰できたのも、小谷五郎さんに頼んで、はつきり言つて入れてもらつているん。一回辞めてね。だけん一司も、それから母も、小谷五郎さんにはものすごく感謝していると思ふ。

七、令子氏のその後

杉田 令子さんは短歌をされていらして、前川佐美雄に師事して……。

杉原 いや、前川佐美雄に特に師事したというわけではない。

安藤 最初は『オレンヂ』に投稿していたのだけど、一司の死後は隠居して、第一線ではなく地域で。塚本さんの『残花遺珠 知られざる名作』(邑書房 一九九五年六月)に、一司が亡くなったので令子さんは短歌をやめたという表現があるんですよ。そのやめたというのは全国の短歌誌などに出すのをやめたということで、地域で短歌指導をしたり。

杉原 地域のこの辺、今は八頭町だけれども、地域で婦人会とかいろいろあるでしょう。そういうところで短歌会をやると、来て教えてくださいます。そういうところが、そういうところの講師をしたりというのはずつとやっています。

母は一言で言うともものすごい謙虚な人というかね。何でもつとずうずうしさがなくかと思ふぐらい。だから杉原一司が令子さんを好きだったのは、そういう謙虚な部分じゃないかと思ふんだ。

安藤 いや、それは謙虚に生きざるを得なかったおばちゃんの人生だと。

杉原 そうかもしれない。律儀な人というか。だけん新しいわけでもない。昔の習いとかね、昔の風習もそれなりにやっていたのかなきや駄目だという部分もあつてね。かといつて封建的な、という意味じゃない。新しいもの好きなんだけども。正月になつたら必ず本家に挨拶に行つてね。歓談してね、欠かさんだが。

安藤 うちのお袋さんから言わせると賢い人。まず寡黙だと。それで愚痴を言いきらんと。あれだけ苦労しとんさるのに。

杉原 愚痴つちやな、絶対言わん。

八、資料について

安藤 一司さんは二回、資料を焼いておんさるだ。商業の資料を焼き、戦争のを焼き。だから性格的に見ると、結構きちんとした人なんだ。前をひきずらずに清算して、次に行く。

杉原 次の新しいことをやると思つたら、前の資料は自分の中ではもう古いというかね。次のものを目指してやらなければいけないというのが強かつたので。だから杉原一司の歌を評価するときに、最後は『メトード』に載っている歌のだけれど、比較的難解な、絵でいえば抽象画的になつてくる。俺がよく分からないのは、どこをもって評価するか。全体でもって評価するのは正しいと思ふのだけれど、最初の『オレンヂ』の辺りに載っている歌が本当にええ歌かという、杉原一司が生きていたとしたら、たぶん否定すると思ふ。ああいう歌は駄目だと。

岡村 焼かれてしまった資料と、現在残つていて今お借りしている資料とがあり、残された貴重な資料を全集に収録することができればと思つているのですが、残すものと残さないもので、選別のようなことはあつたのでしょうか。

杉原 令子のメモにも、捨ててしまったけれども後で悔やんでいたとあるのは、やっぱり残しておけばよかった資料があつたのかもしれないけど、全部捨ててしまったということだと思ふ。奈良にいたときに受け取つた手紙については、岸本光治さんに処分してくれと言つたとメモにありましたよね。

岡村 そうですね。書簡集を作つたときに、奈良で受け取つたものがありました。ませんでした。

杉原 たぶん、あるときに前の資料を捨てたというのは、そのときに書いた歌や理論的なものなどでまだ未発表のものがあつたのだと思ふけど、こんなのは駄目だと。これからはさらに新しいことをやらないけんということ、一切合切、古いものをその時点で捨てていると思ふんでね。探しても、たぶんそれは出てこない資料だと思います。

安藤 人間が生きたときに、次の時代の歴史を考へて選択しないので。後

の者がそう言っただけの話で。結論はない。たまたま偶然、捨て忘れたり、令子さんが大事だと思っただけで残っていたもので、ないという前提でものを考えられたほうがいいんじゃないかな。一般論として。

九、方法論をめぐって

安藤 一司さんは情緒的ではなく論理的だが、とても。それはあなたにも伝わるとするといふ奥さんの話だけ。論理的な思考をされるというのはもともとあったものなのか。やっぱり一司さんの血筋なの？

杉原 これは隆一さんには話したような気がするのだけど。私が四〇を少し過ぎたぐらいのときかな、母に『メトード』のことについて聞いたことがあるのよ。私は子どもの頃は全然短歌も知らないし、杉原一司がどんな歌を歌っているかも知らなかったのだけど、ちょうど働き出す頃かな、二歳ぐらいのときに、パソコンで杉原一司を調べたら『メトード』という雑誌を出していたと出ていて、そのとき『メトード』の中身を少し見たんですよ。だけど歌が分からないからさっぱり分らんし、何を言っているのだらうというので、そのときはもう忘れていた。

その後四〇ぐらいになってから、なぜ母に『メトード』のことを聞いたか。私の仕事は理系なのだけれども、地元の日立金属の前の会社の、日本フレイトという会社に入りまして、技術的な分野でずっと仕事をしていました。それで三二歳ぐらいのときに、材料の研究開発をやっていました。磁性材料という、まあ特定の材料ですが、結果として、偶然、ものすごくいいものが作れてしまったわけ。それで業界ではかなり有名になった。とんとん拍子に自分だけ役職が上がって、そこその地位にあったのだけれども、若い人を育てないと駄目でしょう。そうすると、その偶然がなぜできたかなというのをずっと考えていて、自分がやったことをおさらいしてみた。偶然を狙ってはできないけれども、いいものを作るためには偶然を必然にする方法があるはずと考えていました。その必然にする方法はどういう方法かなと。

そのときに『メトード』が浮かんだ。「メトード」は方法論を意味する言葉だということは知っていたので、ひよっとしたら参考にならないかと思っただけに聞いたわけ。自分の考え、自分のやっていることはこういうことで、いいものを作るためには偶然みたいな部分があって、その偶然をいかに必然に、その確率を上げていくかにはこういう方法がある。俺の中では

あるのだけど、親父もそういうものとして「メトード」を考えていたのではないかと聞いたことがあった。

そうしたら母はうーんとだいたいお考えで、おまえの言うことは何かよく分からんな、だけどやっぱりおまえ一司さんに似ているんだと言われてね。どかが似ているの、俺の言っていることが合っているのかと言ったら、いやいや、そうじゃなくて、いろいろ理屈をこねるところがそっくりだ。

安藤 ほさきさんの奥さんも、あんた一緒だが、お父さんと。理屈っぽいかと、この間、私も聞いた。

杉原 だけん、そういう部分では結構しつこく、疑問に感じたらね。というのはこれも仕事の話だけど、いくら賢い人でも、普通は決められた手順でものを作っていたら絶対に進歩しない。一定の確率では当たるとは。実験計画とかいろいろあるのだけれども、そういうものに頼っていたら一生かかっても一つできるかどうかぐらいの話になってしまう。飛躍的にいいものを作る、新しいものを作るといったら、ほとんど偶然なんですよ。結果としてノーベル賞をもらっているような人でも。

安藤 実験しとつたら、偶然。

杉原 その偶然が出てくるというのは何かあるわけ。他の人とは違うやり方をやっているはずだと。それをどうやって追いかけるかなというので、私には私なりの考え方があってもいいけれども、一司の場合はそうではなくて、あくまで歌だからね。言葉の問題だから。どういふのかね。言葉と言葉をつなぐときにシンメトリックではないというか、ある部分、非安定なところを残して言葉を選んでるんだと思う。

安藤 自分がこう思っただけというのを吐露してはなくて、こうすれば相手がどう考えてくれるだろうという世界だよ。

杉原 俺らの場合は自分でものを作らないといけないから少し違う。だけれど歌の場合だと、読み手に感じさせるためにどうするかという話になったら、やはり非安定なところを作っておかないと相手考えない。感動を覚えない。

安藤 その余地を残しておかなければ。別の視点からいうと、今の学問ではいわゆる暗黙知と形式知という問題があつて。教育でいうと、職人技とか。暗黙知として、これまでは短歌は先生を見て習えと言ってきたのだけれど、一司さんはその暗黙知を形式知にしようとしたような気がする。職人技を形式知に持つていくことをしんざつた。成功したか、失敗したか

は別だけど。

これまでの暗黙知みたいなことで、師匠としかできんような世界をしとったって駄目だど。これからは近代化というか、戦後、価値観を変えて短歌が生き残るためにもっときちんと理論的なことを明らかにして。芸術の世界でも。そういうことを目指されたのではないかと。それはとても革新的なことだわな、この世界では。

杉原 だけど俺みたいな理系だど。

安藤 当たり前か、ある程度。

杉原 例えば水というものがあつて、水というのは理系の人が考えたらH2Oで、零度で氷になって、水に対するイメージはみんなはつきりと同じなんよ。でも歌の世界は違うわけね。水と考えたら悲しいと思う人もおれば、冷たいと思う人もおるだろうし、いろいろ言葉って違うでしょう。だから客観的と主観的とが違うんだが。理系と文系とは。

私から見たら理系のほうはものすごく客観的にできていて。客観的なだけではものは進まないのだけれども、新しいものが偶然できたら、それが客観的になっていくわけよね。これを定義してしまうから。そうすると、どんどん進むわけ。文明というのはものすごく進んでいるでしょう。この十年、二十年。

安藤 文明のほうはね。科学技術とか。

杉原 パソコンにしても何にしても、ほんの五年、十年経ったら世の中がガラッと変わるぐらい進歩してしまうのだけれど、文学の世界は、そういう面で見たら飛躍的な進歩をしないでしょう。それは成り立ちが違う。ただ、その文明が進むことがいいかどうかということがあるので、別にそれがすごいとは思わないけれども、ただ、歌の世界でも何かそういうね、何ていうかな。

安藤 革命的なことがしたかったんでしよう。分かりやすいのは塚本邦雄がいい短歌を出してくれて、かつ、わしの理論は杉原やと言ってくれたから、これが一つ確立して、ああ、そうか、よかった、よかったと。

杉原 だから杉原一司の思いは、塚本邦雄が有名になったために、一応、達成できてるんよ。まあ半分ぐらいは。自分がどうこうは別にしてね。

一〇、ほさき氏の好きな一司歌

杉原 私が好きなのは、その掛け軸にある、「曼珠沙華 ひそみさくのに

おちる陽を しゅう末のひは 今日にあらずや」¹²。自分自身が歌が分からないということがあるので、この歌が好きというのは、二、三、理由があつて。一つは、これは掛け軸に掛けているので、単純に言えばなじみがね。他の歌はやつぱり少し奇怪な言葉が多いので、なじみがない。

それと、これは地元の書道の先生が八頭町の展示会に発表するというので書かれたのをもらったのだけれど、選んだのは母、杉原令子。母が選んだ歌だというのがあつてね。これははつきり言つて杉原一司らしくない歌。非常に直接的な、悲しげな歌でね。辞世の句ではないけれども。小林貴文さん¹³が来られたときにこの歌はどうですかと聞いたら、うーん、らしくないなという話で、私もらしくないと思つている。これはどちらかというとな杉原令子が歌う歌みたい。杉原一司の言葉で、歌の中身は母が歌つているような。

杉田 いつ頃から掛けられているんですか。

杉原 まあ三〇年ぐらいは掛けていると思ふな。他にもいっぱいあるのに、なぜこれを出したかという理由は分かりませんよ。

安藤 『日曜文芸』かな、おばちゃんが塚本邦雄に、どの歌を載せるかええかと相談したということもあつたかな¹⁴。

杉原 杉原一司の初期の歌は母のものと近いのでいいのだけれど、『メトード』を創刊する頃になってくると全然違う歌なのでね。たぶんそう聞かれたら困ると思ふだが、『メトード』の辺を見て杉原一司をすごい歌人だと思ふような人に見せるのだつたら、『メトード』にあるのを推薦しなければ駄目なのだけれども。ただ、自分の好きな歌となるとたぶんそうではなくて、もう少し前の『オレンヂ』の辺りに載つている歌。だけん一司は、別に歌そのものに興味を持っていないんじゃないが。

安藤 メトードに興味があるわけだ。メソッドに。

杉原 そうそう、メソッドに。新しい歌を作るのは、具体的には言っていないのだけれど、ある方法論を使つてきた歌がたまたま評価されたらありがたいし、そうでなければしようがないなというのが最後の辺だと思ふ。

安藤 蔵多優美さんはよく『メトード歌文集』¹⁵を作つてくれたな。

杉原 評論のほうが本人の資質には合っている。

一一、二つの時代（一九四八／一九六八年）について

安藤 戦後、世の中を変えたらどうかという言い方は短絡的だけれども、不

条理なものに対する憤りをアピールしたいと、例えば一司が思っと思ったとするが。その思想というのは、一九六八年頃、ほさきさんや僕らがこの世の中はいけんがなと思つて抵抗したものと共通するところがあるのではないだろうか。私は思いますが、ほさきさんはいかがお考えかと。

杉原 大きな意味では似ているのだけれども、ただ杉原一司の場合は、やはり生い立ちや自分の健康、そちらのほうに影響していたんだと思う。時代の流れも当然ありますよ。自分のことを考えると、健康とか生い立ちとか、そういうことは全く関係なくてね。たいてい大学に行っている人だからそんなに貧しいわけでもないよね。そんなに圧迫されているわけでもないじゃない？ 自由な中でやっていた運動と、自由がないところでやっていたのが違う。

安藤 あとは逃げ道がなかったろうな、一司さんは。僕らは結局、日とつてしまつて、普通の日常性に戻つてしまつて。

杉原 だけん一時的な、社会運動が私たちの若い頃に起こつていたというのは一つの風潮であつて、それが最後まで続くと自分自身でも思つていなかった。政治活動に最後まで残る人もおるのは事実だよ。でも大半の人はそうじゃない。今の若い人から見たら、一つのゲームみたいなもの。一司の場合にはそうではなくて本場で、抑圧された自分を解放するというか。自己確立するための不条理に対する抵抗だった。

安藤 それが文学、歌を作ること。

杉原 たまたま評論が得意だったのと、たまたま短歌をやつていて。単独だったらできないが、塚本さんと力を合わせたら新しい方向ができると思つた。たぶんね。だけん、その方法についてははつきり具体的には言つていないけれども、相当考えていたんだと思う。

ただ言葉で表すと、単発的に表れた言葉というのは一つの形になつてしまふから、やっぱり難しいところがある。特に短歌は言葉の芸術だから。言葉の芸術を言葉で定義するというのは非常に難しいのだと思う。実際には、短歌にしても絵にしても音楽にしても、人間の感情をいかに揺さぶるかというのが目的なのでね。それを言葉で表すこと自体が非常に難しいから悩んでいたのだと思う。

結果として、ある考え方のもとで非常にいい歌ができたなら、単発では駄目で、失敗はあるにしても一〇首の歌を作つたら一つや二つはいい歌ができるような修練というか。それが方法論。それを言葉で表せというのは、

たぶんできない。できないのだけれども、その修練ができるような人をつくるのが方法論だと思つたと。変な話だけど。

安藤 道半ばで倒れられたんでしよう。その理論なり、完結しているん？

杉原 俺は、完結はしてないと思う。生きていたらさらに何か違う、もう少しはつきりした形で表すか、あるいはたぶんできなかったと思う。ただもうこれで満足して、後は俺は別のことをやるわとか、自分は歌だけを作るわということにはなつていない。ずっと追い詰めていくんだと思う。それから。

うちの令子さんも歌については、あまり考えずにまず歌いたいことを書いて、それから語呂合わせではないけど言葉を変えたり、いろいろしたほうがいいよと。俺が歌を作ろうかと冗談で言つたら、それを本気にしようたからね。そんなことはあつたけれども。だから結果としては、母は何も言わない。私が理系以外はあまり興味がなかったのだけれども、文系の仕事というか、文学などをやらないことについて逆に何も言わなかつたね。

安藤 逆によかつたと思つているのもあるんじゃないの。

杉原 反面教師的な部分があつたのかもしれない。自分たちはそれでやつたけど、はつきり言つて幸せになつていないからね。あんたは自分の好きなように生きたらいいがという感じだったね。

あと、私の名前は変わっているわね。ほさき、と。今では珍しくはないけれども、俺らの時代では男性でひらがな自体が珍しかったので、特に子どもの頃によくいじられてね。何だおまえ、稲穂のほさきか、とかね。いじめというほどのものではないけど、いじられたりしてべそをかい泣いて帰つたりよくしよつて。

そうしたら母が、おまえの名前は父親が物の先端という意味でつけた、とてもいい名前だよと。いろいろ聞くと、人の上に立つという意味じゃない。物事の先端を究める人になつてほしいという名前なんだけれども。それを聞いて、うーん、なるほどと思つて、それからあまり思わなくなつたけど。

安藤 本当は一司さんの思いが詰まつつたんだな、やつぱり。

杉原 うん、名前としてはね。やつぱりそういう名前を付けるということ

